

New Shop & Environment

SEIBU SHIBUYA

Special Feature

Facade Design

Feature Article 1

Office & Canteen

Feature Article 2

Teppanyaki &
Yakiniku Restaurant

TSUTAYA
SEIBU



SHOTENKENCHIKU MONTHLY MAGAZINE OF STORE DESIGN/INTERIOR/ARCHITECTURE 2015 Vol.60 No.12

New Definition of Design

Vol. 52

Jörg Schellmann



イェルク・シェルマン

1944年、ドイツ・カッセル生まれ。1969年より近現代アーティストのエディション作品の制作販売を始め、ミュンヘンとニューヨークを拠点とする。2006年、デザインした家具コレクションを自身のギャラリーから発表。今年、モローゾが家具コレクションの多くを扱うことを発表した。(ポートレート撮影: Nanka Schellmann)

デザインの新定義

イェルク・シェルマンはアーティストのエディション作品の制作販売を長年手掛けている、異色のデザイナー。その活動と並行してデザインする家具をイタリアの家具ブランド「モローゾ」が扱い始め、改めて注目を集めるようになった。アートのプロの視点からデザインされた家具というのが興味深い。

インテリアよりインダストリアル

「家具のデザインを始めたのはなぜですか? ギャラリーの経営を主にしていた頃から、ファインアートよりも建築、グラフィック、インダストリアルデザインへの興味が大きかったのです。それがアーティストのエディション作品を制作する理由でもありました。作品の形式や美的要素に関わることができるからです。私は当時から自分で使うテーブル、棚、収納家具をデザイ

ンしていました。そして2006年、家具のデザインを仕事にするのに十分な経験を積んだと判断して、自作の家具を発表し始めました。

「今年4月にミラノで開催した『Vis-à-vis』展のコンセプトを説明してください。

私のデザインする家具の形態は、デザイナー不詳のインダストリアルなもの、ミニマルアートやコンセプチュアルアートの作法の影響を受けています。この展覧会では、私の家具をそれらのアートの文脈に配置し、長年の成果がどのように形づくられてきたかを伝えようと試みました。

「モローゾから発表されているソファ『Conduit』のコンセプトを教えてください。

発想の起点は、張り地で包んだクッション材を床に置き、それをミニマルなフレームで固定することでした。柔らかい巨大なボリュームに鋼管をはめたのです。結果として生まれたソファ

は、アーティストのピーター・ハリーの作品を連想させるものになりました。

「モローゾとの協働にはどのような経緯がありましたか。

最初に連絡があった時、私の家具がモローゾの意図に合うとは想像できませんでした。しかし私のデザインに惹かれ、何らかの協力体制のためにアプローチしてきたのは、創業家出身でクリエイティブディレクターのバトリツィア・モローゾ本人なのです。長時間の議論を経て、モローゾは私の家具のいくつかを製造するというので合意しました。それは「シェルマン・コレクション」として、モローゾの従来のコレクションと一緒に運ぶのです。私の家具はミニマル、機能的、直線的で、シンプルさを追求したインダストリアル感が特徴。一方、モローゾは創造的で想像力あふれるデザイナーたちが、住空間を想定して多彩な家具を発表しています。

「デザインのインスピレーションは何ですか。私は住宅のインテリアというものに全く興味がありません。その代わり、インダストリアルな世界と、その仕事場や道具の持つ規律に魅了され続けてきました。機能性、無駄のない外觀は、私に大きなインスピレーションを与えます。またミニマルアートは基本的な形態を扱い、それらの対比や規則的な連続が作品になります。コンセプチュアルアートは、あらかじめ決定したシステムに従って形態が決まり、最終形を導くことがあります。同様の手法によっても、いくつもの家具をデザインしてきました。一量産品とリミテッドエディション作品の違いをどう考えますか。

正面に言えば、その大半はステータス、稀少性、それゆえの価格の違いに過ぎません。私の家具は、豪華で贅沢なものに對峙する存在で、多くの人にとって手が届くものでありたいと凛然と思っています。



4月にモローゾのショールームで開催された『Vis-à-vis』展ではシェルマンがキュレーターを務め、ドナルド・ジャッド、リリアム・キリック、ダニエル・ビュレンらのアート作品と自身による家具を組み合わせて展示を行った(撮影: Alessandro Paterni)